

カリキュラム研究の個人的回顧と展望（1）

安彦 忠彦

Curriculum Vitaeにおける「カリキュラム」

一般に「履歴書」のことを、英語ではCurriculum Vitaeという。文字通りに訳せば「生育歴・生育コース」ということになる。本稿では、筆者のCurriculum Vitaeを通して、自らのカリキュラム研究をまとめておきたい。学問的な観点からは、先に『名古屋大学大学院教育・発達科学研究科紀要・教育科学』第66巻、第2号（2019年度）2020年3月に、日本カリキュラム学会での発表をもとに「カリキュラム研究を志して—名古屋大学教育学部時代を中心に—」を書いて、後輩の参考に供したが、もう少し「筆者自身のカリキュラム」という観点からも書いておき、若い人の参考にしてほしいと思う点があったので、本稿を構想した次第である。これはアメリカの現象学的カリキュラム学者のパイナー（W.Pinar）の主張する「カリキュラムを、学習者にとって対象化するのでなく、主体化すべきもの」で、学校の中だけでなく、その人個人の生涯に亘るものとしてとらえるべきだ、との見方に近いものである。その際、主として私と接した人との関係、人間関係に焦点を当ててみたいと思う。主たるものといえば、家族・兄弟、友人、教師との関係が主であるが、そこには、いろいろな意味で、今後のカリキュラム研究に役立つ観点が見出せる。

1. 誕生から小学校時代まで：自然豊かな環境と温かい人間関係

筆者は、昭和17年3月16日生まれである。姉3人、兄3人の後の末子だった。早生まれだった上に戦争中で、食糧事情も悪かったため体は小さく、小学校では4年生までいつも列の先頭に並んでいた。その小ささは、敗戦後に進駐してきた米軍の、1年生に配布してくれたというゴム草履が筆者には大き過ぎて、とくに1足だけ別に取り寄せてくれたほどで、後に7歳下の妹ができたとき、それを彼女が4歳の時に履いていたのを思い出す。

東京の山手線の大塚駅近くの、陸橋の線路沿いの生まれだったが、空襲で一番始めにやられるということで板橋に強制疎開させられ、皮肉にもそこで空襲にあって実の父と長兄

を失った。終戦直前の6月10日の東京空襲によるものだった。筆者はいつも泣いてばかりいて、気の小さい子だったようで、確かに生前の父と兄を含む当時の家族写真を見ると、筆者はどれも泣いているものばかりである。それも、そのような空襲のある中で、姉の背中におんぶされて逃げ回っていた生活を思えば、当然だと自分を慰めてきたが、周囲を気にする神経質な性質や慎重さは、そのような幼児期の経験が基礎にあると思う。

小学校に入学したのは昭和23年4月である。神奈川県川崎市の内陸部の立川市寄りの端、今のJR南武線の稲田堤駅から5分ほどの、多摩丘陵などの山に近い公立小学校(菅小学校)であった。しかし、教育史的に言えば、戦後新教育の時代に入っていたのに、この学校には誰も新教育の児童中心主義に立つような授業をする先生はいず、35人ほどのクラスで、1,2年の2年間は、初老の後藤先生という女性教員の指導を受けた。ただ、その先生が、筆者を含めて男子3人が、本当に身体が小さく栄養失調に見えて可哀そうに思ってくれたのか、1回だけだがわざわざ自宅に招いて、食事を下さったことはいまだに忘れられない。そういうことが許された時代だったともいえる。

小学3年プラス・マイナス1年が境目であるといえる。小学校時代は、学校の友達といえど草野球の友達で、近くの多摩川の河川敷の草だらけの球場で、毎日のように練習した。他方、学校では3年の時は、女性の中年のメリハリのある厳しい先生で、私は何かで叱られて額に白墨で罰点を書かれ、廊下に立たされたことがある。4年の時は、まだ若い女性の先生でやさしかったせいか、何かのことで先生を困らせて泣かせてしまったことがあるが、もうそのときに好きな女の先生や女の子がいて、異性を意識していたように思う。

4年生の時のことでもう一つ忘れられないのは、その年に引っ越して家が変わり、学校は少し遠くなったが変えなかった。それでも環境が変わったことが影響したのか、その年の夏に円形脱毛症になり、数カ月間、野球帽をかぶって学校通いをしたとともに、夏の川遊びで友達と多摩川に来て、溺れそうになったことがあった。泳げなかったのに、みんなについて行って深みにはまったのだが、友達のお兄さんが抱き上げてくれて助かった。水中から水面は見えるのに、顔は水中から外に出せず、もがくだけで苦しかった。助け上げられたときは真っ青な顔をしていたという。死を身近に感じたときだった。

5,6年の時の担任は男性の中年の、中国大陸から復員した青白い顔の、インテリ風な佐藤 敏先生で、筆者は友達数人と、授業が始まったのも気づかずに、教室の外でメンコ遊びをしていたのが見つかり、罰としてその先生に「お前もか!」と頬を叩かれた。学校で先生に叩かれたのは、生涯でそれ一回きりであるが、その後、その先生には大変可愛がってもらい、6年生の時には、暇があると休日でも学校に行って、学校の隣の官舎におられたその先生の許しを得て、顕微鏡を使わせてもらった。その頃は、通常目に見えない水の中のゾウリムシやミドリムシ、珪藻などの微生物や、植物の花粉や葉の細胞、蝶の鱗片な

どを見ることに夢中になった。現在まで、生命現象を探究する生物学や、脳科学に関心を持ち続けられたのも、その頃からの延長であると思う。この頃に何かに夢中になるということは、非常に大切なことのように思う。先生とは筆者が大学生になった時にも親しく語り合うことがあったが、筆者を殴ったことは忘れておられた。

この小学校時代の経験で、自分の成長・発達に関係した大事なことは、とくに4年生以後、自分には知的な好奇心や勉強意欲が強くあったらしく、通信簿の成績が上がったことであろう。このことは、今考えても発達段階的に妥当なことで、特別支援教育での「9 (10) 歳の壁」説や、J.ピアジェの認知発達説の「形式的操作の段階」の時期とも対応しており、また日本経済新聞の「私の履歴書」欄を見ても、多くの人が小学校3, 4年生頃に、人生の一つの転換点ないし出発点を見ているのを知り、大きな段階区分の時と認められる。後にそれは、脳科学的にもほぼ証明されることになった。(拙編著『子どもの発達と脳科学—カリキュラム開発のために—』勁草書房, 2012年)

身体面では、背は低かったが比較的運動神経はよかったので、友達とよく外で遊んだこと、4年生頃から、先述のように異性を意識し始めたが、自分から身を引く方だったこと、5年生になって初めて列の先頭から4人目ぐらいの背の高さになり、走力の面のコンプレックスはなくなったこと、教科の学習では水彩画など絵を描くのは苦手だったが、音楽は好きで6年生になってもまだボーイ・ソプラノで歌えたこと、顕微鏡で見られる微生物の構造や生命体の様々な活動に関心を深めたこと、が自分の特性だったなと思い出される。

友人との関係では、体も小さく、気が弱かったから、何かトラブルを起こさないように、喧嘩にならないように常に気を付けていたが、とくに思い出されるのは、ある雑誌を借りて返す時になって、その雑誌をどこかに紛失したことを知り、返す時期が来たのに返せなくて困っていたところ、貸してくれた子供が引っ越しをしていって、何も言わずに済んだことに、本当に安堵したことを覚えている。その時以来、約束したことをきちんと守れない、あるいはそれを正直に話して許してもらわなかった自分を、道徳的に見てダメな人間だなと深く見つめるようになったと思う。「なすべきことをなすことができず、してはならないことをしてしまう」という矛盾に悩み、それが後の思想形成の基礎になったといえる。

ただ、この道徳感覚は、日蓮宗（立正佼成会系）を信じる母親が、毎晩寝る前に仏壇に向かってお題目をあげる姿と、筆者が5年生のあるときに見せた、その母への反抗的な言動や態度について、「お前も近くのキリスト教会にでも行ってみたら」という母の言葉とに大きく影響されていると思う。その見えざるものの存在を信じることと道徳感覚との結びつきは、この母の言動によって自然なことと感じていたようである。

2. 中学校時代：勉強好きと、嫌なことの実体験の意義＝先が見えないまま自分を探る時期

中学校時代の生活は、今のJR南武線で中野島駅から2駅分、川崎方面に行った宿河原駅というところの、多摩川土手沿いにあった公立中学校（稲田中学校）に通い、田畑と梨の果樹園に囲まれて暮らした。学力面では恒例の模擬テストなどで上位を占めていたが、1位になったことはほとんどなかった。数学が苦手で、英語が好きになり、発音も比較的よかった。後で知ったことだが、音感の良い人は発音もよいとのことで、音楽が好きだったことが幸いしたようである。数学は幾何が好きで成績もよかったが、代数の分野は苦手で、その克服に努力したけれども、ほとんど成果は上がらなかった。逆に英語は、当時、東京大学の学生が主宰していた全国的な模擬テストで満点をとったこともあり、それが採点者の当時の東大生の目にとまっていたことが、その後、筆者の人生に大きく関係した。

それは、その学生のお姉さんに当たる量 和子先生という方が、中学2、3年生の時の音楽科の担当で、筆者は声がよかったのでその先生に可愛がられ、在学中に学校の文化祭で独唱をさせていただいた。奇遇にも、この先生の弟さんに当たる方が先の東大生の模擬テストの採点者で、筆者の名前を覚えてくださり、お姉さんの量先生に、「姉さんの中学に、安彦という生徒がいるでしょう。」と尋ねたことがあると、ご本人からずっと後で聞いた。東大へ転学するときも、この弟さんに進路の相談をただけだけでなく、後述のように、精神的にも深いところで決定的な影響を受けたと言ってよい。

学力は常に全校で10番以内に入っていたが、1番になった記憶がほとんどない。実際、筆者はいつも2番手以下であり、それでよかったとの思いで今に至っている。実際、当時の筆者は「努力家」だとは言われたが、「秀才」とか「頭の良い奴だ」と言われたことは全くなかった。そのため、受験世界の実情をほとんど知らなかったが、受験学力が十分あるとは思わなかったくせに、まぐれもあるからと先生の反対を押し切って、当時の東京教育大学附属の駒場高校と大塚高校を受験してみた。その両方とも、試験問題を見てもう無理だと分かったが、未練もあってわざわざ結果を見に行き、落ちたのを確認して、あんな試験に受かるのはどんな奴なのか、と不思議に思った。頭の良い人はいくらでもいるのだと、実感して帰ったが、自信を失うことはなかった。実際、3年になって進学を考え、どの高校に行こうかと思っていたら、前年度からその中学校のすぐ近くに、県立の高等学校が新設されたばかりで、伝統校で進学中心の川崎の工業地帯の方の高校よりも、交通費で家には経済的負担の少ない高校を選んだ。

そのことと関係するが、中学校・高校と、筆者に世話が任されて家で数百羽の鶏を飼い、その卵を毎週1回ほどの頻度で、電車に乗るのが恥ずかしかったが、卸しの店に持って行って、生活費の足しにしていたことがある。夏休みには、多摩川で朝から子供でもできる、

1 mほどの竿に浮きなしの糸と針を付け、多摩川の水中の石に隠れている、カゲロウの幼虫のチョロムシと呼ぶ虫を餌に、浅瀬の流れに入って竿を前後に動かす「あんま釣り」というのをして、ハヤやヤマベという小魚を釣り、毎日100匹以上も釣って鶏の飼料にした。この経験は、時に勉強があるからと言って、逃げていた畑仕事とともに筆者の原体験の一つで、とくに卵を産めなくなった年寄りの鶏を「潰して」、家で鳥鍋にして食べるまでにすることは、筆者の仕事の一つとなっていて、人は命あるものを殺して食べる生活をしなければならないことは、ある意味では自然なことと思っていたが、自分の命と比べて考えさせられていた。

中学校の時期の最も大きな精神的な面での変化は、キリスト教に触れてかなり自分を見つめることができたことである。家の近所にプロテスタント系のある派の教会があり、そこで毎週日曜日の午後に、「バイブル・クラス」という英語で聖書を読む数人の会が開かれていた。教えてくれるのは外国人で、当時はわからなかったがドイツ人かスイス人だった。それは、発音で通常英語では語尾のsは「ズ」と発音するのに、その外国人はドイツ語風に常に「ス」と発音していたからである。英語が好きになっていた筆者は、ほとんど毎週この教会のクラスに通っていたが、そのうち伝道集会に一度出てみないかと誘われて、キリスト教の伝道集会に参加するようになり、既述のように母親も「道徳教育」になるからと反対しなかったため、私はだんだん聖書に親しむようになった。しかし、中学校時代から次の高校時代までは、まだ学校の勉強で頭が一杯で、集会にもバイブル・クラスにも時々参加になっていた。

ただ、一つ思い出すのは、2年生の時の中間試験のときだったか、ある生徒がカンニング問題を起こし、筆者もやったと教員に言ったらしく、筆者は呼び出されて調べられたことがある。筆者は何で呼び出されたのか分からず、そんなことは何もしていないというと、それで調べは収まったが、その時はそれがどれほど重大なことか分からなかった。後で、そう思われることをしていたことを反省したが、自分の道徳的な感覚が深められた出来事だった。中学校時代が筆者の人生の方向を固めてくれた時期であったと思う。

中学生の時代は、今考えても何か浮ついていた時期で、いろいろ経験し意識しながら、どれも明確な自覚を形成できずに、ただ感情的に流されていたように思う。これといった確たる認識の形成は、周囲に対しても自分に対しても、どちらもあいまいなままであったように思われる。これは筆者が後に、独自の主張として、個人的成長・発達において、「個性を探る」時期・段階と名付け、「自分を探ること」が主たるテーマとなる「前期中等教育」の学校として、中学校をとらえるべきとの主張の根拠にもなっている。結局、この時期には「自分が何者か」はわからないのである。とらえどころのない時代だなと今になっても思う。アメリカのミドル・スクールの指導者だったD.アイクホーンEichhornが、この時

期を「青年移行期（移春期）Transescence」（青年期へ移行する時期）と名付けたのも頷ける。ただの「移行」の時期であり、まだ目標・目的は定まっていないのである。

ただ、高校へ行くと決めたとき、筆者よりも優秀な友達が何人かいたが、経済的理由で就職していった生徒がおり、高校へ進学できるということは、能力があるからではなく、経済的条件などによる理由があり、自分はそういう条件が幸せな方だと、明確に認識していた。

3. 高校時代：人生・進路を自分の個性と突き合わせて考える＝先を見定めながら伸ばす時期

それに対して、高校時代は、かなりはつきり自分をとらえようとしていた時代だと考える。小学校高学年の頃から、人間とは何かといった「〇〇とは何か」という端的な問い、哲学的な問いを持ってはいたが、それを正面に据えて考えるようになったのは高校時代である。その高校は、先述のように家に近いという理由で選んだ、公立の新設の普通科高校（神奈川県立多摩高校）だったが、その2期生として入学した。

ここで、影響を受けたのは英語と国語の担任の先生だった。英語はもともと好きだったが、高校のReadingの担当の先生が映画好きで、洋画の中に出てくる英語表現を毎回プリントしてきて、教科書以外の生きた英語の例文を沢山示してくれたので、非常に参考になった。後にその先生は、出身大学の早稲田大学の教員になられたとのことだが、そのような学問的な好奇心を満たしてくれた先生がもう一人いた。生物の担当の先生だったが、高校2年生のある日、その先生は「今日は教科書はやらず、最新の研究成果を、みんなにも教えてやろう。暫くすると新聞などで大騒ぎになるぞ!」と言って、何と後にノーベル賞を受賞した、ワトソンとクリックの「遺伝子のDNAの二重螺旋構造論」を、その授業時間を使って正確に教えてくれた。生物学に関心を持っていた筆者は、その理論を聞いて「凄い発見だ!」と興奮した。その先生も間もなく大学の教員になって行かれたと聞くと、そのように知的な刺激を与えてくれる先生方に、研究という活動の面白さを感じさせてもらった気がする。

大学に行きたいと思ったのは、大学卒業という学歴により、少しでもよい就職の機会を得たいと思ったからというよりも、むしろ、教員になるためにもっと勉強して、英語の学問的な専門知識を深めたい、という知的欲求の方が強かった。ただ、家に経済的な余裕はなく、大学まで行くのは兄弟で筆者が初めてだったこともあり、現役で国立大学に入れなければ就職するようと、親からは固い約束をさせられた。しかも、受験勉強はしていたが進学校ではなく、高校の先生も夏休みにボランティアで講習をしてくれたが、大学合格率だけを上げて学校の評判を高めようという進学絶対主義ではなかったもので、ガリ勉はし

なかった。実際、1学年5クラスのうち、2クラスは就職クラスだった。勉強好きで大学へ行っただという面が強かったこと、現在の大学合格を目的とする受験オンリーの勉強に流れている、その後の高校教育のマイナス面による害を受けなかったことは良かったと思う。現在は明らかに、大部分の学生は大学合格が目的で、それもよい就職をするために大学に行くというものであり、それは大学院受験率の低下に表われていると思う。筆者の大学生時代にも、優秀な者は卒業して大会社に行き、大学院に行く者はその次か、どこにも行けない者だと評されていたが、やはり向学心に燃えていた学生が、もっと主体的で前向きに大学院に受験・入学していた。

高校時代の人的要素として欠かせないのは、親友ができたことである。部活動以外にも、高校生活で目立ったのは、友人との交わりであり、人生や進路を語り相互に切磋琢磨したことであろう。ある程度、進路ないし将来の職業を定めると、みなそのために必要な勉強に精出した。筆者は高校の英語の先生の影響と自分が好きだったことにより、英語の教員になることを第一志望とした。筆者には小・中学校時代からの友人との交わりが続いたとともに、高校で新たに別の中学校から来た友人ができ、秀才で勉強やスポーツで何をしていても筆者は勝つことができないような友人もいた。彼は後に日本銀行に入り、彼なりの人生を送ったが、特別凄い活躍をしたわけではない。そういう友人は筆者の目標となり、勉強への意欲の支えとなったが、何が何でも受験学力を上げて一流大学へ行かねばとの気持はなかった。

また、大学受験向けの全国的な模擬テストが自分の高校を会場に行われると、それに参加して結果を見ることで情報を得た。他の高校の優秀な生徒の名前などが、常に上位に並んでいるのを見ては、それに刺激されて勉強に励んだが、筆者はなかなか上位に食い込めず、全国には優秀な生徒がいるものだのと、自分の力の無さを痛感した。でも、だからといってそれほど気にすることはなかった。とくに数学は苦手で、いくら頑張ってもよい点が取れず、自分は向いていない教科なのだと思わされた。大学受験まで、家庭教師につくこともなく、唯一、高校3年の夏休みか秋ごろに数カ月、当時の駿台予備校の夜間に通ったことがあるが、そのときの英語の授業の面白さ、講師の個性的で自由な語りなど、高校の先生との違いに感心した記憶がある。ただし、大学合格だけを目的とする、現在のような受験本位の教育でなく、自分の血肉になった点で弊害はなかったが、結局、受験には役立たなかった。

親からは「国立大学に現役合格」しなければ、就職して働くようにと言われて、筆者もその覚悟でいた。そこで考えたことは誰もが同じだと思うが、確実に合格できる大学を探すことだった。高校の先生方には「1年浪人すれば東大にも受かるだろう」と言われていたが、浪人はできないので、国立大学の一期校から東京教育大学文学部国語科、二期校か

らは東京学芸大学学芸学部英語科を選んで、確実な合格を狙った。不本意だが当時の自分の受験学力で、ほぼ大丈夫というものにしたわけである。ところが、一期校の東京教育大学には、数学の点数が足らずに不合格となり、二期校の東京学芸大学には数学も含めてかなり良い成績で合格した。一期校が不合格だったことには、あまり失望感はなかったが、数学ができなかったことは自分でも残念だった。しかし、高校が受験校でなかったことはよかったと思う。

4. 大学時代

4.1 東京学芸大学時代：勉強中心に自分を幅広い教養に挑戦させる時期

英語の教員になろうという将来の職業を決めた高校生の時点で、その好きな語学をさらに深めたいとの思いがあったから、勇躍、東京学芸大学に通い、授業には熱心に出て英語の勉強をしたが、1年目が終わるころ、大学の掲示板に、東京大学教育学部への転学試験の案内が貼られていた。当時は国立大学の間で、各学部が定員に満たない場合それを満たすために、他の国立大学の学生に欠員募集をする制度があったのである。これは5年ほどで終わってしまったが、当時の国立大学は、どこも2年生までが一般教育科目で、科目名は国立大学でほぼ同じであり、3年生になると専門の各学部に移るというカリキュラムになっていた。もちろん、科目名は同じでも、中身は各大学の教官が自由に決めていたので、レベルも種類も違っていた。筆者は、1年浪人すれば東大に受かるかもしれないと言われていただけに、東大の試験というのはどういうものか知りたいと思い、ほんの試しに受けてみようという気持が動いた。ただ、試験科目は大学の一般教育科目（人文・社会・自然の3分野の科目）の全分野から出題されるという。東大の駒場の教養学部の2年間で身に付けた能力と同じレベルのものを求められるわけで、とても無理ではないかという思いとともに、何も勉強せずに受けるのも自分の成長のためにはよくないと思い、当時の東大の教官が書いた哲学、法学、物理学等の各分野の概論書や入門書を買集めて、3分野の教育内容をそれなりに勉強した。にわか勉強とはいえ、単なる受験勉強ではなく、視野が広がった。

いざ試験に臨んだら、10名の募集定員のところ全国の国立大学から100名余という10倍の競争率の受験者があり、大教室一杯の受験者や、賢そうで、年齢も上の人も混じっているのを見て、筆者はもう合格はとても無理だと思ったが、試験の内容は運よく筆者の理解している方面のものが多く、自然科学や数学もそれなりにできた。それでもとても合格は難しいと思っていたので、結果を見に行かなかった。ところが、大学から合格の連絡があり、入学の意志の有無を問われた。実際に発表を見に行くと合格になっていたので、「はて、

どうしたものか」と困ってしまった。「教育学」などという学問は、高校までに習ってもいないわけで、果たして何を学ぶのか不安だった。

そこで相談したのが、中学校の音楽の量 先生の、東大出身の弟さんだった。すでに大学の先生になっていたと思うが、アドバイスは一言で言えば、「転学すれば良い友人や勉強環境が得られるよ」ということだった。学歴の面で得すること以上に、研究・勉強の面で、他の大学とは大きな違いがあるということだった。筆者は、英語の教員免許状は東大へ移っても取得できるという確証を得て、興味があつたわけではないが、全く未知の学問の教育学を学ぶために、思い切って東大に移った。

4.2 東京大学・教育学部時代：自分の専門に悩む時期

「東大教育学部」に来てみたものの、何を学べばよいのか、ただ学部の授業を受けて、新たな知識を身に付けていくだけの毎日であった。教育学とは何かを知らず、またその中身にそれほど興味を持っていたわけでもなかったのも、与えられた授業を受けて単位を満たし、英語の教員免許状取得のために、文学部英語英文科の授業もいくつかとって、2年間を終えてしまった。終えてみて思ったことは、一つは、当時の教育学部は、東大の中では戦後にできた学部（教養学部、薬学部、教育学部）の一つで歴史が浅く、規模も小さく、教授陣も旧文学部教育学科の先生方が中心だったので、一部の東大教授からは「第二文学部」などと陰口を叩かれていたこともあり、大学の中での地位は最低だったようであり、そんな学部は駒場から進学する学生には不人気で、それで定員が埋まらなかったという事情があったようである。当時の東大教育学部の、学内での評価はそういうものであったと言える。

もう一つは、筆者の学部卒業は1964（昭和39）年であるが、その頃の教育学界は、日本史の方の著名な歴史家で、当時、東京教育大学教授だった家永三郎氏が国を相手に起こした「家永教科書訴訟」問題が社会的に焦点となり、極めて政治的で運動論的な性格を帯びていた。実際、朝鮮戦争後の保守党政府・文部省の右傾化により、日本教職員組合（通称・日教組）の左翼的な政治政党との結びつきが強まり、常に政府・文部省と対立して、国による教科書検定の理論的根拠を、東京大学教育学部の教育行政学科の宗像誠也教授や五十嵐顕助教授らに求め、家永教授が、自らの編集した高校の日本史の教科書を検定で不合格にされたことで、文部省の教科書検定制度を憲法違反であると提訴したのである。その際に、東大のこの関係の有力な教授らがこの家永教授を支持していたことにより、日本共産党の青年組織である民主青年同盟（通称：民青）に所属する進歩的な学生たちが、これらの東大教授の周囲に結集し、保守党政府と文部省に正面から対決していた。

学部の掲示板には、民青系の政治宣伝のビラが自由に貼られているのを見て奇異に感じ

たとともに、掲示板使用が自由ならば、他の政党やその下部組織が政治宣伝ビラを貼ってもよいのに、それが何もないこともなぜかと思った。そして、もし完全に自由ならば、すべての政党と下部組織に平等にビラを貼るスペースを与えるべきであり、一部の政党とその下部組織だけが、掲示板をそのように使うことに疑問を感じていたが、そういう政治宣伝の場として掲示板を使うと、際限がなくなるとの危惧も持ったので、筆者は結局考えが決まらず、それを公に問題にしたことはなかった。

その様子を、学部の内外的人たちの中には、「教育学部の教官は学者・研究者と言えるのか。彼らは単なる運動論を唱えているだけではないのか」と眉をひそめて見ていた人も多かったらしく、「教育学及び教育学部の教官・学生」が、そういう左翼的な政治性をもつもので、一部とはいえあまり正当な学問や研究者とは言えない、と学内でも評されていた面があったので、学生の間にも教育学部を敬遠する傾向があったといえるのである。

後に大学院に進学してみて思ったことは、当時の筆者の世代では、東大に文3の試験で入学し、文学部の希望した学科に行けなくなった、能力はあるが意欲の低い学生が、不本意に教育学部に進学してきている場合が多く、その後の活躍を見ても、筆者のように外部から入ってきた学生の方が意欲的で、とくに大学院から東大に入ってきた学生が目立っていることは、留意してよいことである。(例：天野郁夫氏、藤田英典氏、佐藤 学氏など) また、東大内部からは、理系学部からの転学部をしてくる学生がかなりいて、物を扱うよりも人間を扱う学問をしたいと思ったという理系の学生が、非常に活躍していたことを覚えている。つまり、**目的意識をはっきり持った意欲のある学生の方が、その後も伸びる可能性が高い**、ということである。

一般には、東大の極めて難しい入学試験を突破して、駒場に入學してきた学生の方が能力は高いと考えられているが、全国には東大の入試に落ちてはいても、優秀な学生がたくさんおり、そういう学生の中から世界的に活躍する人が、数多く出ていることを認める必要がある。東大に入學しても、卒業するときは何ともならない人もいるのである。昔風に言えば筆者も一高→東大というモデル・コースではなく、他の公私立の旧制高校→東大というコースをたどったことになる。つまり、武蔵高校→東大、東京高校→東大といった経歴の学生の方が、生き生きと活躍している例も多い。専門分野にもよると思うが、いわゆる東大生に対する固定観念や伝統的な見方はもう古いと言える。アメリカの場合でも、始めから同じ大学に入って同じ大学を出るという学生よりも、一つの大学にこだわらず、いくつかの大学を回って力を付ける学生の方が高く評価される、という風土がある。筆者は、アメリカの風土の方が健全で望ましいものだと考えており、そういう意味で**今後の日本の大学及び高校は、入るときの大学や高校よりも、出た大学や高校が評価されるようになるべきだ**と思う。その途中は、個々人によって様々であってよい。一つの道しか経験しない

人物よりも、いくつかの道を経験した人物の方が、多様化し複雑化した世界には必要とされるからである。

それでも、筆者は教育学に初めて接し、まだ教育学に深い興味を持つことができず、語学に未練があったので、文学部の言語学科に学士入学をしようとした。それは、高校時代に基督教の伝道集会などに何度か出ていたが、教会からまだ精神的に十分納得していないのに入信を迫られたことがあり、それを機に入信に強引な教会を去り、先の音楽の先生と弟さんが通っていた、内村鑑三の無教会基督教の集会に行ったことが大きな理由である。その集会には高校時代に数回行って、とても難しい内容の聖書講義だったので敬遠していたが、大学に入ってから毎週のように行くように心がけた。

東大に移ってからすぐに「東大聖書研究会」に入会した。これは東大の前総長の矢内原忠雄先生が始められた研究会で、矢内原先生は内村鑑三の弟子として、無教会の信仰を広く学生に伝えたいと願って、毎月1回開いていたものだった。筆者が参加した時はすでに矢内原先生は東大を離れておられ、研究会の顧問は新約学者で文学部教授の前田護郎という先生だった。しかし、毎月出てこられて実質的な指導をしてくださったのは、当時、農学部助手だった原島圭二先生で、それ以外に教会に通っていると言われた医学部の衛生学教室のハンセン病にくわしい山本俊一先生だった。

東大聖研には大学院を去るまで正規メンバーとして出席していたが、学部時代はずっと幹事というか世話人として、庶務的な雑事をほとんど一人で担当していた。メンバーは毎年外部の人を含めて5、6人だったが、幸いにして世話人は筆者が大学院に移ってからも確保され、細々ながら会は存続した。昭和43年4月に、筆者が大阪大学に就職して東大を離れてからは、全く連絡し合うことがなくなり、その年の6月に東大紛争が起きたので、その後は完全に関係がなくなってしまった。筆者が知り合った先輩では萩野谷 興氏、後輩では雨宮 忠氏や佐々木弘一氏など、各界で活躍した人がいるが、矢内原先生に直接指導を受けた方々が執筆・出版した『信仰と生活の中から』東大出版会を見ると、後に学界・実業界・法曹界等で指導的な役割を果たした方々が多数いたことを知った。筆者が大阪に来た時に出席していた、北白川集会の主宰者の富田和久先生もかつてのメンバーだった。

しかし、先述の大学の外の無教会基督教者の集会には、大学院在学中も継続して参加していた。千代田集会というその集会は80人ほどから成り、旧約学者の関根正雄先生の主宰するもので、筆者が高校生の時に最初に聞いた聖書講義は、旧約聖書の「エゼキエル書」という預言書だったため、「神への背き」という人間の罪に対して大変厳しい内容だった。教会に行っていたころは新約聖書ばかりで、旧約聖書の話は全くなかったので非常に興味をもった。大学に入ってから毎週のように参加し集会の様子を知るにつけ、内村鑑三という日本人基督教者の考え方・生き方・信仰の持ち方に強く惹かれ、結局、卒業論

文も「内村鑑三の教育思想—不敬事件を一断面として—」と題してまとめるほど、内村に影響を受けた。何よりも内村が、キリスト教は元来（西）アジアの宗教なのだから、それを日本人として学ぶのに西欧の人の手を借りることなく、聖書本文の、旧約はヘブライ語、新約はギリシャ語を学ぶことにより直接学べばよいという、日本人としてキリスト教信仰を学ぼうとした「独立心」に感銘を受けた。

そこで、関根先生の影響もあって、ヘブライ語をもっと学んでみたいと思い、東大文学部へ学士入学を試みたのだが、小論文と面接で見事に落とされてしまった。小論文では言語学と無関係な内村鑑三の思想を論じたこと、面接ではヘブライ語は東大の言語学科では教えていないこと、などが理由だった。幸か不幸か、学士入学の試験日と他の就職の二次試験日とが同じだったため、学士入学に失敗した筆者は、卒業式の日になってもどこにも行く当てはなかった。会社に就職する気はなく、教員になる気持ちはあって神奈川県教員試験には合格していたが、教育学か言語学のどちらかで大学院に行こうと考えていた。

そんな時、まさに卒業式の日であったと思うが、助手の人から、「安彦君、主任教授の細谷俊夫先生が君の就職はどうなっているのか心配していたよ。もし行き先が決まっていないのだったら、私の許で1年間、研究生でもして進路を考えてみたらと言っていたよ。」と聞かされて、進路に迷っていた筆者はすぐに細谷先生にお会いして研究生の手続きをした。ただ、研究生出願の時期はとうに過ぎていたのに、当時は教官の意向が優先されたのか、期限を過ぎていたにもかかわらず、教授会で認めてもらえたのである。それだけ余裕のある時代であったと言ってよい。

5. 研究生時代：生活上、自分が最も弱く感じた時期

研究生になってからの最大の関心事は、やはり進路であった。進路に関する出来事で記録に残しておくべきことの一つは、このときに信仰的な「回心の経験」をしたことである。まだ進路も決まらず、これからどうしようかと思い悩んでいたのも、暇に任せて聖書を徹底的に読むことに決心し、2, 3週間かけて「創世記」の最初から「ヨハネ黙示録」の最後まで、通して2回読んだあと、「まず神の国と神の義とを求めよ」という言葉が筆者に強く迫ってきて、筆者は信仰を強いられて信じた。回心後の1週間ほどは、景色が虹色に輝いていて、心もまさに平安そのものだった。この時の様子を関根先生に手紙で伝えたところ、先生の信仰の月刊誌『預言と福音』の表紙裏に、その手紙の一部を掲載し、最近の若者の入信の典型例ではないかと評するとともに、編集後記で「それでもこの青年にはまだキリストの十字架がはっきり見えていない」として、今後の成長を求めている。この不十分さの指摘は筆者にとってその後大切な指針となった。この経験で学んだことは、人は最

も弱くされた時に信仰が与えられる、ということであった。(筆者の場合は、進路を閉ざされたときだが、人によっては死ぬほどの大病を経験したときとか、人生の大失敗をしたときとか、である。)

進路に関するもう一つのことについては、細谷先生に研究生としての指導をお願いしておきながら、研究生になってから教育学で大学院に進むか、言語学でもう一度学士入学を試みるかで悩んでいたため、数回の研究生としての指導を受けただけで、それ以外にほとんど先生に会うこともせず、6月になった。さすがに早めに進路を決めないと受験準備が不十分になると思い、細谷先生の許可を受けずに、関根先生のご自宅に相談に伺った。筆者は、関根先生は言語学への転進を励ましてくれるのではないかと、という淡い期待をもちつつ伺ったのだが、筆者の話聞いた先生の最初の言葉は意外にも、「君にどれほどの言語学的な才能があるかわからないが、僕は君に言語学への道は勧めない。なぜなら、教育学の方なら就職口は多いけれども、言語学の方は本当に就職口がないのだから」というものだった。

それを聞いて筆者は、帰りの道すがら、中央線の駅までの10分か15分ほどの歩きの間に、「言語学の道は閉ざされた。教育学の道に進もう。」と決心した。先生は、筆者の思い付きに近い言語学への転進について、その甘さを指摘されたのだと思ったからである。たとえ信仰的熱心からにせよ、一時的な思いの強さに現実を忘れてはいけないことを悟らせてくださったと思ったのである。筆者の場合は、これでよい方向に働いた助言だった。

その翌日から、教育学で大学院に進学するための受験準備に入った。細谷先生の研究生でありながら、先生の専門には直結しない研究テーマで計画を出していたが、教材論に関する研究生報告を提出したと思う。テーマの決め方は、「他の人でもやれることなく、自分しかやれないことをやる、このことではあいつが一番で、他の人にはできないと言われる人になる」という考えによるものだったといえよう。後に「社会的に信用されることが第一だ。そういう人間になること！」と主張する基礎となる考えだったと言える。このテーマは、先生の専門の教育方法学や産業教育学とは離れていたが、先生は何も言われなかったばかりか、その後も先生の専門に入らずに「教育内容・教育課程・カリキュラム」を専門にしてからも、何かにつけて先生は筆者をサポートしてくれた。この間に細谷先生から学んだことは、①教育学は用語の定義がはっきりしていないので、自分で論文を書くときは用語の専門的定義をしっかりとすること、②物事には必ず二面性があるので、ある事実をもとにまとめる際は、必ずその反対の事実の有無を見た上で、その両方を踏まえて結論を出すこと、の2点であった。また関根先生の聖書講義からも、言葉の定義や使い方をしっかりと厳密にすることの大切さ、を教えられた。筆者が他の教育学者と多少違うとしたら、この点で少しでも厳密であろうとしたことぐらいである。

もう一つ、研究生時代からのことで大切なことは、昼間は理論的な研究をし、夜間は定時制高校の英語教員として実践をしていたことである。当初は、学生間で言い慣わされていた「理論と実践の統一」との標語を、実際に経験して見せるという意気込みで、昼は大学院で理論を、夜は正規の高校教員として実践をし、生徒会の顧問や部活動の軟式庭球部の顧問などもした。筆者が勤務したのは神奈川県立希望が丘高校だったが、当時の定時制高校の生徒の中には、優秀だが家庭の事情で昼間は働かざるを得ない生徒や、在日韓国・朝鮮人の子弟という事情から、優秀なのに夜間に通っていた生徒たちがいたのである。教員としては、生徒たちのためにと、種々の点で当時の教頭・副校長とぶつかったり、文化祭における生徒の無茶ぶりを心配したりと、わずか2年半だけだったが、中身の濃い経験をした。

これによって思ったことは、「事実」は簡単なものではなく、「理論と実践の統一」などと、口だけで言っていた進歩派の学生・院生の甘さ加減を実感したとともに、「理論」よりも「事実」を創っている教員・教師の方が、教育学の世界では価値がある、という思いであった。私は元来が教員になろうとしていたこともあり、実際に経験してみて、その「人づくり」という事実の創造の方が、研究者として理論的世界で認められるよりも、価値が高いと確信し、今に至っている。研究分野にもよるが、教育方法・カリキュラムの分野では、どんな立派な理論を唱えて見せても、事実を創造できないのでは画餅に過ぎないと思っている。高校での教え子とはもうほとんど接触が無くなったが、彼らとの思い出は、坂本 九の「見上げてごらん、夜の星を」の歌と共に、弱い者への配慮を忘れない気持として筆者の心に残っている。

それにもかかわらず、修士課程の2年目の後期からは、論文完成のために実践をやめ、研究に専念した。従って実践経験は研究生の時から修士課程の2年目の前半まで、わずか2年半であるが、筆者は、教育学界において、研究者としての価値は実践家に劣る、との自覚がある。研究者の間には、研究者になれなかったから実践家になっているのだ、といった俗な見方があるが、筆者は決してそういう見方は正しくないと思っている。研究分野にもよるが、アメリカのように、実践経験のない教育学者は信用できない、との見方の方が妥当で健全であると思う。

6. 大学院時代：専門を固めるとともに人生の使命感を抱いた時期

大学院受験の時は、その入学試験が最も厳しい時だった。筆者の年から数年間だけだったが、新たに第2外国語も試験科目に入り、結果的に学校教育専攻は10人の定員のところ、入学できたのはこの年2人だけだった。前年の入試では第2外国語は課されず、筆者と同

期に学部を卒業した大学院進学希望者は4人全員入学したのに、この年は下からストレートに入った者は一人もいなかった。筆者は、面接のときに「君はドイツ語ができるね」と細谷先生から言われて、これが決め手だったのだなと直感した。確かに、筆者のドイツ語の力が示せる問題が出たのである。**運というものがある**，と感じたものである。

さて、入学はできたが、何を専門にするかはまだはっきりしていなかった。ただ、細谷先生のもとには沢山の優秀な院生がいたので、むしろ筆者はそうでない、あまり人がやっていない分野を専門にしたいと考えていたため、細谷先生の門下に入ることは全く考えず、人気のない「教育内容」講座の、誰も院生のいない先生に指導をお願いしに行った。ところが、筆者の希望を聞いて、その先生が最初に言われた言葉は「面倒臭えな」というものだった。筆者はその先生の部屋を辞すと同時に、「もうこの先生には指導は頼むまい！ただ、専門はやはりこれでいこう。」との思いを固めて、若い比較教育学講座の山内太郎助教授に指導をお願いしに行った。**ただし、どの先生についても、指導は自分から頼みに行かなければ、先生の方から来なさいなどということは、通常はなかったものである。だから「東大は学生を崖から落として、自力で這い上がって来る奴しか育てない」と、その厳しさを言う人がいた。**

教育内容の教授は、昭和20年代の新教育運動のカリキュラムづくりが盛んだった頃は、脚光を浴びていたが、昭和30年代に入りその種の運動が鈍り、中央集権的な教育行政に変わって、もうかなり教育界のカリキュラム研究の関心が冷めてきていたため、自分の専門を変えようとしていた時だったようである。人気がなくなり、学生も教員も集まらなくなったからといって、専門を変えるような研究者は本物ではない、と筆者は思った。しかし、山内先生は教育内容の専門ではないので、何と言って指導をお願いしようかと考えた結果、当時の比較教育学が各国の教育制度の比較に留まっており、そろそろ教育内容の比較研究も必要ではないか、と思いついた。そこで、そのように切り出したところ、「自分もそう思っていたところだ」と意外にも好意的な反応があったので、渡りに舟とばかりに、「ついては先生、私の指導教官になって頂けませんか」と強引にお願いして承諾を得た。

ただし、修士論文は山内先生の指導にもよらない、日本教育史講座の仲 新教授の指導と支援のお陰で、明治以来の教科書を収蔵する「東書文庫」に通って作った「第1期国定修身教科書教材の教育方法学的検討—教材史研究の一つとして—」と題するもので、口述試験の時に、先に指導を断られた教官にはケチを付けられたが、山内先生は何もいわれず、細谷先生が「でもまあ、安彦君は論文を2年間で書き上げたのだから」と、ここでも助け船を出してくださった。実際、この年に修論を出した院生は、筆者以外は3年かけていたのである。この修士課程の2年間の勉強で、**自分は実証的な研究を第一とするために、比較研究と歴史研究を基礎的なものとして行った上で、理論・実験研究を行おうと心に決**

めたように思う。

しかし、山内先生の指導による比較研究の成果を示せたのは、進級した博士課程1年での日本教育学会誌『教育学研究』(第38巻, 第4号, 1971年)に載った、筆者の処女論文「西ドイツ中等教育改革の基本的性格—陶冶理念と教育課程の側面から—」だった。これも山内先生に促されて応募し、レフェリー審査で修正の上掲載されたのであったが、何とか先生の期待に応えられたのでほっとした。修士課程の2年間と博士課程1年間の計3年間の研究活動をまとめたもので、その博士1年修了で中途退学し、大阪大学文学部に助手として赴任したのである。東大の院生時代の教官が、みなどちらかというと好意的な方々で、筆者のような、よく言えば講座を越えて学ぶけれども、悪く言えば基礎の不十分な、腰の定まらない、ふらふらしている院生をも寛容に受け入れてくださったことに、今になって本当に感謝している。

教官でもう一人忘れてならない方は、教育方法講座を担当された教育心理学者の東洋先生である。先生は、細谷先生が是非にと求めて、教育心理学科でなく学校教育学科の教育方法講座に来ていただいたとのことだった。筆者は心理学的な実証研究には強い興味を持っており、その種の実証的性格を教育学はもっと強めねばならないと思っていたので、良い人事だと思っていた。しかも、東先生の恩師で、先生がフルブライト交換教授として東大に招いた、当時イリノイ大学教授の教育測定・評価の世界的権威、L.クロンバック先生が、教育心理学の論文を扱う大学院の論文演習の授業で、専門の異なる筆者を非常に(東先生は「不当に」と思ったらしい)高く評価してくれたので、クロンバック先生には余計に親しみを感じていた。

東先生が、クロンバック先生について語られたエピソードで忘れられないのは、東先生が自分の研究の実験データを集めていたとき、仮説ピッタリのデータが出たので、大喜びでクロンバック先生に伝えに行ったところ、言下に「そういうときこそ、どこかに間違いがないか、しっかり吟味しなさい」と注意されたとのことであった。さすが一流の先生は違うと思ったものである。ほぼ同じことを、後に信仰上の恩師の一人である、京都大学の物理学者、富田和久先生からも伺ったときは、やはり優れた方は問題点を共通に認識しているものだな、と思った。

その東先生は、ご自分がカトリック信者であること、そして筆者が無教会キリスト者であることを知って、何かにつけて筆者を、冗談を交えて話のタネにされた。ご自分が出入りするバーに、筆者を含む親しい院生の何人かを連れて行ったときなども、「無教会では、今もまだ禁酒なのだろう?!」などと筆者をからかった。ただ筆者にとっては、先生のゼミによって教育の「個別化・個性化」について、またクロンバック教授のゼミによって「教育評価」について、それぞれそのあるべき性格が明確なものとなり、「理論・実験研究」

という筆者の研究活動のもう一つの軸を明確にすることができたと言ってよい。日本人としては、キリスト者が少数派であることにより、「個を大切にする」教育の実現が、先生と共通の関心事だったからである。

なお、授業研究的な研究の流れとして、筆者はこの当時、横須賀薫氏、柴田義松氏や稲垣忠彦氏らが、斎藤喜博氏をリーダーとする授業づくりとその理論化に努めようとした全国的な組織、「教授学研究の会」に不定期に参加して、斎藤喜博氏の唱える「教授学」の神髄から何かを学ぼうとした。その盟友の林 竹二氏（当時、宮城教育大学長）の実践などからも多くを学んだが、斎藤氏を絶対視する会の雰囲気抵抗を感じて、ついにその会員にはならなかった。「カリキュラム」にほとんど言及しない「教授学」という用語にも不満があった。しかし、これが、後の名古屋大学時代に、「教育技術の法則化」運動をリードする向山洋一氏と関係する基礎となった。

この大学院時代で忘れられないのは、東大紛争のことである。1968（昭和43）年には、学内で医学部の研修医制度を問題にした全共闘系学生による、教授会の学生処分反対闘争が始まり、教育学部前の赤門から医学部正面の広場は毎日のように騒がしかった。そして全学的にも、各学部の教官の不誠実な対応を糾弾する全共闘系学生と、逆に教授会の対応を是認し、暴力的でなく話し合いで解決を図ろうという民青系（日共系）学生との対立が激化し、二つの学生運動グループによるデモ行進のやり合いも頻繁となり、学内は騒がしくて研究どころではなかった。筆者は大学院自治会（院生協議会）の委員に選ばれ、同じ院生がこの2つの派に分かれて対立するのを避ける努力をして、主として急進的な動きをする全共闘系の院生に心を寄せつつ、彼らが過激な行動に出るのを極力防いだ。

ところが、筆者が就職して大学院を後にしてからは、そういう努力をする者がいなくなり、過激派が学部教授会に突入して学部封鎖をしてしまう事態となった。この事情は、阪大の助手になって半年後に、東大教育学部に用事で出向いたとき、院生時代に親しかった助手の方から「安彦君がいなくなってから、困ってしまったよ」と言われて知ったことである。その筆者も、その後すぐ、大阪大学が紛争に突入し、今度は助手としての立場で、紛争に関わらねばならなくなった。筆者の彼らとの議論で特に気を付けたことは、仮に相手の主張が理解できても、何かが少しでも引っかかっているときは、それを無視せず決して相手に同調しない、ということだった。これは今でも非常に大事な心得だと思っている。

院生時代の友人との関係では、全共闘系で1年後輩の、終生の友人ともいえる村岡 篤君（後の明治大学教授）と最も親しくなった。筆者の学生運動に対する姿勢は、一つは自力で主体的に考えて問題に向き合っていること、もう一つは暴力的な行動は支持できないこと、の二つであった。学生・院生時代は、教育学部の周囲に民青系の進歩的な友人が多かったが、彼らと話していると、暴力反対を言い、なかなか穏当で理屈は通っているが、気が

ついて見ると、それらの考えはみな日共系の機関紙「赤旗」に書かれているものと何も変わらず、自分で考えたことではないこと、だからこそ穏やかに自信ありげに話しているのだと分かった。それを知ってから、彼らも権威主義で事大主義から抜け出せず、いつも党の指導者の言うことに従っているだけだと知って、それなら右翼と同じではないかと痛感した。

それ以後は、言葉足らずであっても自分の考えでものをいう、全共闘系の学生・院生のシンパ（同情者）になったが、暴力に流れやすいという理由から、決して彼らの仲間にはならなかった。中に入ると客観的な見方ができなくなると思ったからである。彼らはそういう筆者らの態度を「第三者・傍観者の態度は敵を利するだけだ」と非難していたが、筆者は、大阪大学の紛争時に「そういう見方をするなら、君ら全共闘系学生も含めて、すべての立場が現在の社会・政治体制に支えられている点では、全く同じではないか。敵の体制に支えられて運動をしているに過ぎない」と、彼らに言い返した覚えがある。

この二つの経験から共通して学んだことは、**特定の集団や組織に加わるべきか否かに迷ったときは、何か引っかかりがある、はっきりしないがわずかでも納得できない部分があるときは、加わるべきでない**、ということである。そこで理性や意志を働かせ、情に流されたり、関係に引きずられたりすると、後で失敗し、後悔するということである。

(次号へつづく)